



1902

米国財界大恐慌

金本位
停止?



昭和八年三月五日

甲
金で冷へたので
不景氣風を引い
たんだろー

米
アー苦しい、
死んでもこの金は
手放さない

乙
イヤ、餘程前から
金中毒に罹って
居たのが、急に
腦へ来て全身
麻痺を起した
のだ



122

120

118

116

州ア Nil スリカ

1903

米國加州激震

昭和八年三月十日

死百四十
傷四千

大

山平ア Nil スリカ

平洋

34

32

メキシコ



激震区域

0 50 100 M.



1904

學良失脚

(亡命に)
昭和八年三月十一日



學良

「俺が弱いんじゃない。
日本が強いんだ。
負けるのは当り
前なのに、
蔣さんも
アマリ
だ。
あとには
野とふれ
山とふれ、
海のおあたりの
フランスあたりで
しばらく手足を
延ばして来よう」



1905

勝て境の緒をしめろ
昭和八年三月十二日



蔣
日本を
関内へ
おびき出して
世界の大問題
よしてやろう



1906

支那の對外政策

昭和八年三月二十三日



日



佛



英



米



支



1907

高建築と博士の教

昭和八年三月二十五日

日本の高建築

依佐美無線電信塔(愛知縣)	二五〇米
原ノ町無線電信塔(福島縣)	二〇〇米
佐賀國製鐵所煙突(大分縣)	一六六米
帝國講事堂(東京)	六五米
京都東寺塔	五七米
名古屋城天守閣	五五米
奈良興福寺塔	五三米
大阪城天守閣	五二、七米
東京三越の塔	五二米
大阪市廳避難針	五二米
奈良大佛殿	四八米
東京第一相互館	四五米
東京帝國講堂	四〇米

○本邦の博士數○

學位	授與人員	現在人員
法學博士	二六七	一九二
醫學博士	五、三八三	五、〇五九
藥學博士	七八	五九
工學博士	六一五	四七五
文學博士	二六五	一八三
理學博士	四二七	三六〇
農學博士	二五三	二二三
林學博士	四九	三九
獸醫學博士	三三	一七
經濟學博士	二六	二六
商學博士	七	七
政治學博士	二	二
合計	七、四〇五	六、六四二

(明治二十一年五月より昭和七年三月までの統計)

1908

聯盟脱退

昭和八年三月廿七日



聯盟
生意氣
不奴だ
アンナ奴
構はふい
方がい



日
いい
気持だ



1909

冥土の旅へ自一月一日
至三月三十日

昭和八年三月三十一日



内田嘉吉六八

秦 豊吉六二

根本 正八三

ワイルズワージー 七六

伊藤日修 八七

南部常次郎 六九

カネタニタリヂ 六二

男

西島 助義 八七

木田伊之助 六七

高山 紀齊 八四

瀧沢菊太郎 八〇

五十嵐秀助 七六

玉の井 幸葉 四二

千賀の浦五郎次 五一

公 九條道實 六五

三輪徳寛 七五

高木利太 六三

布施慶助 六九

堺 利彦 六四

須藤義衛門 七四

若尾謹之助 五二

後藤武丈 六三

渡邊海旭 六二

上野李三郎 七〇

山川義太郎 七四

奥 好義 七七

山口 実徳 七〇

足田桂太郎 六四

細谷十太郎 七〇

栗本庸勝 六九

田中 宏 七五

力石雄一郎 五八

大竹武吉 六七

吉野作造 五六

竹本朝太夫 七八

的場 中 七九

鍋島桂次郎 七四

北村政次郎 五二

大谷嘉兵衛 九〇

浅田徳則 八六

1910

米國惡論墜落

昭和八年四月四日

米國飛行船アクロン

新ギンサー州

バーチガト沖まで
墜落惨死す



1911

日米の真意

昭和八年四月十日

米 双葉よして断たずんば斧を用ふるの悔あり、ソーヂヤ・今の内に……



日 米賊若し来らば寶刀一閃真ニッだ



1912

飛で火に入る春の蟲

昭和八年四月十七日

伊豆の大原山



1913

九十二の厄年

(馬越翁 逃く)

昭和八年四月廿一日



馬越

どうもお待ち
遠ふ様でした、
漸やく九十二
のお仲間入り
が出来ました。

炭沢

待つて
居ましたよ。

大倉

よくお早く
来られまし
たね。



本日人口一萬に對する病死數

一年間の結核死亡數

1914

結核王國日本

昭和八年四月二十八日



心臓病	痛	腦膜炎	衰弱症	腎臓病	老衰	呼吸器病	腦溢血	結核	消化器病
六	七	七	一二	一二	一二	一六	一六	一八	二二

日本	北米合衆國	獨逸	仏蘭西	伊太利	英吉利
一二〇・〇〇〇	八〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇	四〇・〇〇〇



1915

夏来る(快晴)天長節

昭和八年四月二十九日



1916

日本の國富



昭和八年五月五日

總額千百一億圓

一人當りは一千七百十圓

（單位千圓）

種類別

△土地四一、〇九

一、三四八△礦山六、四九九、六
 五一△礦山及礦山三四三、一四
 三△礦山四八三、〇〇〇△樹木
 六、七〇六、八一五△家畜及家禽
 三四六、三五六△礦物二二、八四
 三、三〇〇△工業機械器具一、
 八〇九、三八一△礦山及礦山三、
 五九八、一三八△礦山及礦山機
 六六〇、二九四△船舶二、〇大
 〇、二二六△電氣及瓦斯供給設
 備一、九〇五、〇四四△電信及電
 氣設備一九九、一〇二△水道設
 備三五二、七七九△貯藏設備一
 八、八四七、三一〇△家具家財一
 二、四七三、二〇一△生產品五、
 四五七、四六六△礦山及家畜地
 產九一六、六四三△雜項二、二五
 〇、五一五△對外債權債務差額
 一九一、五九二

府縣別

北海道五、八六八

六六三△青森一、一五六、一四
 四△岩手一、三〇八、八七五△
 宮城一、四九四、〇六九△秋田
 一、五七二、五九〇△山形一、
 六〇五、三六三△福島一、九八
 七、二三五△茨城二、三一一、
 三三六△栃木一、八七〇、七九
 三△群馬一、七二〇、一九四△
 埼玉二、〇五五、三八四△千葉
 二、一九九、二二五△東京一一
 六八九、六四九△神奈川三、九

二一、六三一△新潟二、九三三
 七七一△富山一、一七七、七六
 四△石川一、二二二、七五〇△
 福井一、〇六二、三七五△山梨
 八六八、六五七△長野三、一三
 二、二一九△岐阜二、一八七、
 五〇八△愛知三、一〇〇、二七
 六△愛知四、六三四、五六四△
 三重二、二九七、八七五△滋賀
 一、二二一、八八一△京都二、
 七四七、五八五△大阪五、五三
 六、〇九五△兵庫四、七八六、
 四六九△奈良一、〇八二、三一
 六△和歌山一、二二七、〇五三
 △鳥取七四八、三三七△島根一
 一三八、四六二△岡山二、一一
 一、〇六九△廣島三、五八七、
 九六五△山口二、一三一、五九
 一△德島八七八、二七二△香川
 八五六、九五二△愛媛一、五七
 四、五七六△高知一、一三〇、
 七三九△福岡五、〇六〇、五一
 六△佐賀一、一三〇、五四一△
 長崎二、六〇八、六三五△熊本
 一、八六四、八二五△大分一、
 四八二、〇〇四△宮崎一、〇六
 二、五一五△鹿児島二、二二六
 五八四△沖縄四四一、一二一

1917

獨乙猶太人教授を追放
昭和八年五月七日



官憲

国民を蠱毒する悪學究め
キリく国外へ立ち退け

一石博士

相對性原理上

俺等の追ひ出さ

れるのは已むを

得ない

アメリカ

に帰化

して一と

勉強しよう



1918

国際經濟會議

昭和八年五月八日



相手はしたたかの
怪物だ。ヌカルまいぞ

甘ま
そろう
奴が来
る哩



1919

獨逸書を焚く

昭和八年五月八日

ヒトラー
儒を坑する
丈けは勘弁して
やる



1920

東支鉄道問題

昭和八年五月九日



俺は
も分け
前を
よこせ

支那

「オイ、くそその
鉄道は俺の
ものだよ。勝手手に
イヂクリ廻しては
いけぬ。」

俺の鉄道だ

俺の鉄道だ



1921

學良馬占山會見

昭和八年五月九日



學良
「よく冥土から
ぬけ出して
来られ
たね」

馬占山

「お前さんも

イ、加減まして

早く冥土

へ来ふさい。

作霖親方が

待つて居ますぞ。



1922

第十五代東京市長

昭和八年五月十日



頭牛塚、身は虎太郎
市會の有象、無象を相手に、
東京座で曲藝の試演、
うまくいったら拍手御喝采



1923

省河熱



1924

瀧川京大教授問題

昭和八年五月十四日



文部省

「不埒千方言語道断

宥す」とは

まかりならぬ。

瀧川

「内乱罪は犯罪で
ない、憲刑は不都合だ。

刑罪を全廃す

ることが犯罪を

絶滅する所以だ。

夫婦は男女の争闘

だ故に文藝通を是認

する。

京大教授連

「學問の研究は

自由だ。俗吏の

干渉する處

でない。



1925

平津陷落日睫に迫る

昭和八年五月十八日



1926

五月場所(支那停戦を申込め)
昭和八年五月十九日

支那の川

コす

休ませ
てんか

秋津島

油断させて小股をすくう気か、
その手は喰はんぞ



1927

群盜蜂起

(北支津が如し)
昭和八年五月二十二日



1928

左傾か右傾か(立場の問題)

昭和八年五月廿五日



1929

支那軍総退却

昭和八年五月二十六日
(北平兵禍を免る)



何應欽
全軍
後ろへ
進め！

1930

高橋藏相居据政友騷然

昭和八年五月二十七日



奇藤
ヤレく
これで一と安心



政友
オヤク
怪しからん
達摩だ



1931

龍川教授問題餘焰

昭和八年五月二十七日



京大教授連

「総辞職だぞ」



文部省

「辞職の自由は
認めてやる」

1932

馮玉祥起つ

昭和八年五月廿九日



馮
 久し振りで一仕事だ。
 抗日を表看板にして、
 北平へ乗り込んで、
 思ふ存分掠奪して、
 蔣を倒して天下を
 取るか。少あくとも
 平津は取れるから、
 二三億円は儲かる
 勘定だ。
 ウマイぞ
 ウマイぞ
 ぞ。



1933

日支停戦

昭和八年五月三十日



日本
また
胡麻
を化
し居
る

支那
ウマク
胡麻化
してやつた



1934

漢人の身長

昭和八年六月三日 ○は異國人

(同北漢合著)
(度量衡考)

允	十尺	霍光	七尺三寸	和熹劉皇后	七尺三寸
薛	八尺有奇	王莽	七尺五寸	劉曜劉皇后	七尺八寸
禹 (或曰九尺)	九尺二寸	劉備	七尺五寸	蔡謨外親王蒙	三尺
湯	九尺	呂布	十尺	顏川張仲師	二尺二寸
文王	十尺	關羽	九尺五寸	張孝忠	六尺
孔子	九尺六寸	張飛	八尺	李晟	六尺
曹交	九尺四寸	諸葛亮	八尺	楊慎矜兄弟	六尺餘
漢高祖	七尺八寸	宋武帝	七尺六寸	馬燧	六尺二寸
光武帝	七尺三寸	陳武帝	七尺六寸	楊牧	六尺二寸
項籍 (漢書八寸)	八尺餘	劉淵	八寸四寸	宗楚客	六尺八寸
昭帝 (昭宗)	八尺二寸	劉曜	九尺四寸	陸景融	七尺
優孟	八尺	曜子胤 (藏人)	七尺五寸	吉頊	七尺
酈食其	八尺	○慕容皝	七尺八寸	郭知運	七尺
東方朔	九尺三寸	○姚襄	八尺五寸	李嗣業	七尺
巨毋霸	十尺	○慕容垂	七尺四寸	侯希逸	七尺
蒼長父	五尺以下	○慕容德	八尺二寸	張興	七尺
蒼長	八尺餘	○申舍	一丈九尺	張巡	七尺
淳于髡	七尺以下	○夏然	一丈九尺	程千里	七尺
晏子	六尺以下	○龐參那	一丈九尺	楊守亮	七尺餘
高策 (家語六尺四寸)	五尺以下	○元突骨	二丈	黑齒常之	七尺餘
韓信	八尺五寸	○大秦人	一丈五尺	郭子儀	七尺二寸
金日磾	八尺二寸	明德馬皇后	七尺三寸	董師德	八尺

1935

西藏獨立す

昭和八年六月六日



南京
「勝手は
しやがれ。」

チベ
「獨立したぞ。」

南京の
馬鹿
野郎！

大西蔵国

英
「チベ
ム
シツカリやれ、
俺が付いて
居るぞ。」



1936

濱松飛行隊火藥庫爆發

昭和八年六月八日



1937

此の大男、総身に智慧が廻る也

昭和八年六月八日



石井全權とルーズヴェルト大統領



1938

甚矣哉彼我軀幹之相異也

(是非戯画)

昭和八年六月八日 見上げ見下す顔と顔



出洲駐米大使とルーズベルト大統領夫人



1939

日印関税問題

昭和八年六月十日



「日
藪から棒に
関税引上げは
ヒドイじゃあないか」

「英
ゴツ子の都合だ。
文句は無い筈だ。」



1940

兄弟牆に闘けども外侮を禦げ

昭和八年六月十三日

(英)



(支)



(米)

1941

不得要領(京大問題解決)

昭和八年六月十四日



小西京大総長

法令の許可範囲で、研究の自由と大衆の自治を尊重して下さい。



鳩山文相

法令と慣例は背かぬ範囲で、研究の自由と自治を認めることい出来る。

跡の

仕末

は一切

君の責

任だよ。アハ……



1942

不得要領政友會紛争解決

昭和八年六月十四日



喜三郎
「双方静まれ！
現内閣は全く
無力無能だ。
併し倒すには
及ばない。
是非々々
で行く。」

軟派



硬派



1943

丹那隧道貫通

昭和八年六月十九日



十六年目に

やっと通った

「とうた
かい？」

丹那トンネル

スピード時代に

珍らしいレコード。

長さ二万五千六百十尺

工費二千七百万円

一尺に付一千五百四十

「とうたよ
！」



1944

近き将来の支那(四分五裂)

昭和八年六月廿五日



1945

日本へく

(放逐された独逸
エタヤ系学者者)



昭和八年六月二十九日

甲「日本へ行けば俺たちも
世界で通るからさ

乙「日本の知識階級は大抵
獨逸崇拜だからさ

丙「日本人は變に涙もろい、
泣きついたら何とかして
呉れるだろう」



1946

冥土の旅へ

自四月一日
至六月三十日

昭和八年六月三十日



杉山	義雄	六八
森田	恒友	五三
馬越	恭平	九二
砂川	雄俊	
長岡	外史	七六
吉田	伊三郎	五六
徳川	実枝子	四三
峯	春煊	七三
岡山	秀吉	六九
錦島	三丈天壽	四四
横山	信毅	五九
星野	金吾	七一
江間	俊一	七三
伏見宮	邦茅王	五四
金谷	範三	六一
齊藤	恂	六四
植山	榮次	六七
楠瀬	熊治	六九
加藤	重三郎	
浅川	敏靖	七四

1947

バルト海
北氷洋連絡運河成る

昭和八年六月三十日



北氷洋



運河は全長二百二十七
白海々岸ソロスカヤより
湖セゾ湖オチガ湖ラドガ湖
及びその間の河を利用し
開門十九貯水堤十五軒線運
河は注ぐ小運河三十一を補
レニングラードを経てバルト海に
ず
パナマ運河八十三軒
スエズ運河百六十四軒
は比して著しく長し



1948

富士の裾野の日射病

(陸軍演習の珍事、死病三百餘)

昭和八年七月二日

気温九十度



1949

國際經濟會議停頓

昭和八年七月三日



米
「何じや？ 爲替安定？
誰が何とぬかそうが
俺様が不承知じや。」



1950

叛逆者の轉向流行

昭和八年七月八日

一同

三田村

「轉向致しました

宜しく御願ひ

申上げます

鍋山

佐野



「もとより逆礫子
致すべき處、
本心よりの悔悟
とあらば

特別

の御

慈悲を
以て討首

致して
つかはす、



1951

国際經濟會議無期休會

昭和八年七月十五日



小田原の
評議は
果然
纏まらず
あきれ
かへるの
飛んだしくじり



1952

メイトル法強制施行難
昭和八年七月十八日



「奈良の大仏様の
丈けは十六米五十一糎
五毫一絲、五一一……
です」



「……俺達は百七十六
キログラム
液の上、ゴリヤク」



「おふへや
牛肉を四百グラムと
お酒を半リットル
買つておいで」



「ふにや？
四町八反
六畝十一歩
じゃと？
そうすると
何アールに
あるかあ」



1953

世界最速新記録

七日十八時四十九分間



昭和八年七月二十三日

ウーニー・メー機



ポスト氏



航路図



1954

熱火
冷水
燃爲
凝爲
翹翹
魅魅

昭和八年七月二十四日



1955

陰の極是陽。陽の極是陰

昭和八年七月二十五日



ナチス

俺が反對する奴は
一人も残らず
死刑に處す
るぞよ



1956

メートル法論戦

昭和八年七月三十一日



尺貫
國民精神を忘却したたけ者め

米突
頑冥固
陋の尺とり
蟲め



1957

五・五事件審判

昭和八年八月七日



判官
如何なる
意趣を
具すべくに
申し立てよ

被告

「只だ皇國を思ふ一念が
如何なるものか
の程願はくお聞きする



1958

無着陸長距離飛行記録

昭和八年八月八日



操縦者

仏人コトス及ロッシ

機名

新ルブリ

出発地

紐育

着陸地

シリアのラヤク

距離

五千八百九十三、五哩

所用時間

五十四時四十四分

1959

南洋無籍島問題

日佛所有權爭議

昭和八年八月九日





1960

防空演習

昭和八年八月十日



1961

新博浪沙

昭和八年八月十六日



ヒットラー
境巡察
中狙撃され
身を以て免る



1962

計數の單位

昭和八年八月十六日
 (事物を換ふる國民心理)
 單位



遍發幕	(反復)
さし	(發射)
曲	(演劇)
件	(舞)
点	(音曲)
筆	(事件)
篇	(物品)
荷	(土地)
服	(詩文)
膳	(荷物)
杯	(藥茶)
切	(箸飯)
足	(酒飯)
級	(切り身)
段	(下駄、足袋)
	(階、順位)
	(階、順位)

臺艘門	(車)
挺	(舟)
旒	(大砲)
張	(小銃、墨)
筋	(旗)
領	(弓)
具	(矢、槍)
振	(鎧)
騎	(甲冑)
蓋	(刀)
着	(騎兵)
合	(笠)
番	(衣裳)
回	(手合)
度	(勝負)
	(反復)
	(反復)

卷丹	(卷物、書物)
面	(書物)
枚	(額、扇、硯、琴)
脚	(紙、薄き物)
棹	(椅子、几)
双	(長持)
枝	(屏風)
本	(筆)
部	(長き物)
通	(書物、書)
盒	(信書)
顆	(香合)
粒	(珠)
條	(米、豆)
管	(鎖、紐)
輛	(笛)
	(車)

名	(人)
匹	(動物、獸)
羽	(鳥)
尾	(魚)
頭	(家畜)
座	(星、山岳)
株	(立木)
輪	(花)
軒	(家)
棟	(家)
宇	(殿堂)
口	(門、刀)
基	(塔、燈籠)
軀	(佛像)
軀	(佛像)
幅	(かけ物)
軸	(軸物)

1963

魚の正味食へる分量

昭和八年八月十七日



魚の名	分量	魚の名	分量
ひらめ	五五	生さけ	六七
中まぐろ	五二	かます	五三
小めじ	六〇	たかべ	六〇
めばち	六〇	さいまき	五〇
れんこだひ	三五	とびうを	六八
あまだひ	四五	あいふめ	四五
おほだひ	四五	いさき	四五
めだひ	四八	ぼら	四五
わらさ	六〇	大あぢ	四七
くろだひ	六〇	こひ	二五
すずき	五二	するめいか	七八
さばら	七〇	すみいか	七二
かつを	五五	大正えび	四九
まがれひ	六八	くるまえび	四九
むつ	五四	あはび貝	四三
まながつを	七四	あか貝	一九
たちうを	六〇	どぜう	五二
新巻さけ	七一	うなぎ	七四

1964

馮玉祥失脚

昭和八年八月十七日



馮
「オイ、兄弟、
しはらく
世話は
ふるぜ」

韓
「ヤレ、
まれでも
しこたま
儲けたらう
イクラか出せ」



從是西 河北省
從是東 山東省





1965

我が三尾我に忠ならず

昭和八年八月二十三日



1966

痘痕相

テラす

国策
協定

昭和八年八月廿三日



誰曰 肝膽 相照 恐是 痘痕 相照 否即 閑譚 相照 孰能 感歎 相照

痘の齊藤

痘の鈴木

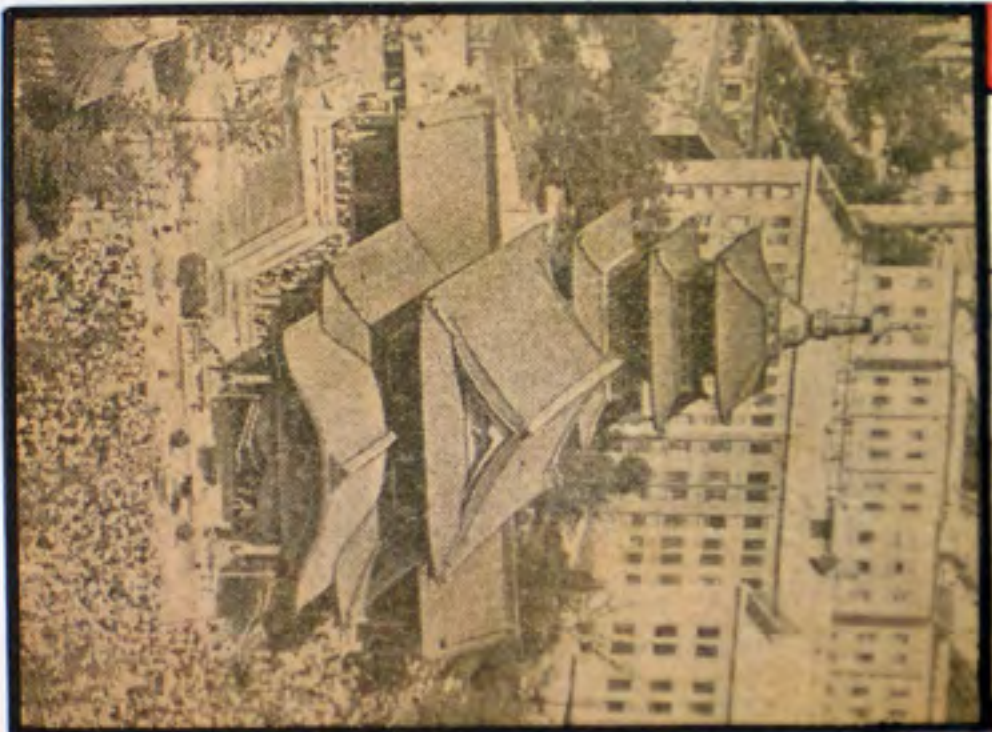


齊藤首相鈴木政友会総裁会見

1967

大震災十周年

昭和八年九月一日



1968

經濟封鎖

昭和八年九月三日



1969

大將は何者ぞ

昭和八年九月六日



是れ尋常の
珍鈍屋に非ず

定めて是れ妖怪の跳梁か
否、洋界の龍龍ふらん

1970

秋霜烈日

(五二五事件)
海軍側論告

昭和八年九月十一日



檢察官の求刑



「死刑とは
何事だ
無罪だ
当然だ」



1971

昔は白虎今は玄武
昭和八年九月十九日



1972

大飈風

(石垣島の被害)
昭和49年九月十九日
風速五十米



風伯
天帝の
命令だから
任方が悪い
一と吹き
吹か
ずい
ふる
まい



1973

生存競争

(學究、姦婦、二人姦夫のKampf)
昭和八年九月二十七日



見玉博士
「アッ!
致命傷だ」

姦婦 勝美
姦夫 生際の
こちい人ね

姦夫 青柳
姦婦 人殺し姦
夫め!

中園 姦夫
黙つて
クダバレ

Kampf um's Dasein = 姦婦生大罪人



1974

逝ける人

(自七月一日
至九月卅日)

昭和八年九月三十日



小田川全之

上原幸太郎 六五

山本春舉 六三

松居松翁 六四

李家隆介 六八

武藤信義 六六

富本豊前 七七

中村福助 三四

乙ノデルクススル 七六

金井 延 六九

佐藤友右 七八

鈴木 穆

小俣 段一 五五

松井文太郎 七六

イラ多王
スィサルアルサイン 四八

巖谷小波 六四

岩田 一 六一

田村彩天 四五

陳炯明 五九

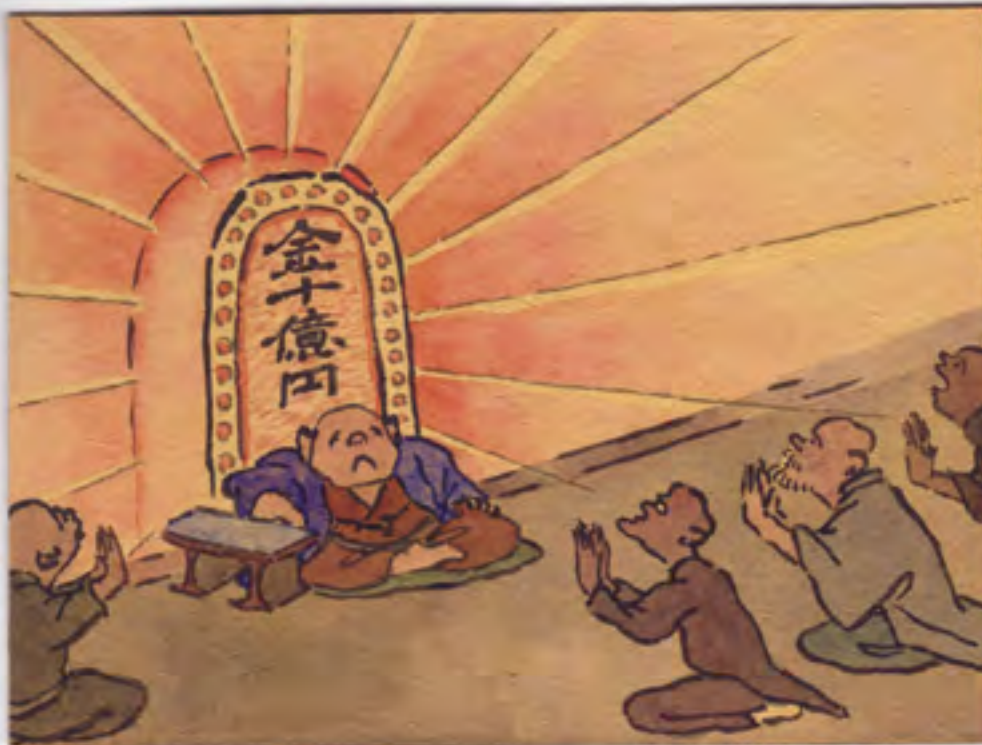
早川龍介

依田鏡二郎 七四

1975

億萬長者

昭和八年十月三日



1976

早く幕を開けろ

昭和八年十月七日



民衆

「長口上はよせ、
早く幕を開けろ。」

幕開未定

齊藤内閣興行

国民生活緩和策

失業防止と救済

疾病豫防と救

防貧と救貧

労資関係改善労働者保護

人口問題対策調査

1977

愈出て、愈奇(獨乙新法)

昭和八年十月十四日



死を望む
不治の病者
を眠らせる
ことは罪悪
に非ずと認
め之を罰せず

「俺の強盗は
不治の病氣
だ、ツ殺して
貰はうか」

「私の貧乏の病
はあまりま
せん、ドーカ
眠らせて
下さい」

「私の愛
戀病はあほ
りません、
眠らせて下
さい」

「私の業病
はあまり
ません、
早く眠
らせて
下さい」



1978

獨乙國際聯盟並に軍縮會議を脱退す
昭和八年十月十五日

獨乙

鬼碌おやぢめ、

喧嘩あら

いづとも来い



國際聯盟
この野郎
蹴ったふ



1979

築地本願寺竣工近づく

昭和八年十月十五日



1980

戸内成島神社社司を懐か



昭和八年十月十七日

戸内大人を

偲びまつりて

忠太

成島の

神の社の

秋を深み

逝きまじ人の

偲はるゝ哉

とこしへに

成島の

神のゝ社に

君のみたまや

とまり

ますらん



1981

ビタミン表(二)

昭和八年十月廿五日



肉エキス	肉汁	牛肉	大豆	トウモロコシ	白パン	黒パン	小麦粉	小麦胚芽	小麦(精白)	大麦(精白)	大麦(半搗)	白米	米胚芽	胚芽米	半搗米	玄米	
一	一	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	一	十	十	十	十	A
一	一	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	一	十	十	十	十	B
一	一	十	十	十	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	C
	一	△	一				△		△							一	D
オリヅグ油	豚脂	卵白	卵黄	バター	クリーム	人乳	粉乳	煉乳	牛乳	肝油	鰵	出シ雑臭	臭百味	鰻	豚肉	牛肝臓	
十	一	一	十	十	十	十	十	十	十	十	十		一	十	十	十	A
一	一	(B ₂ +) 十	十	一	十	十	十	十	十	一		十	一		十	十	B
一	一	十	十	一	十	十	一	十	十	一			十		十	十	C
十	十	一	十		十	十	十	十	十	十	十					△	D

1982

ビタミン表(二)

昭和八年十月廿五日



	A	B	C	D		A	B	C	D
落花生油	十一	一	△		豆腐	十			
人參	廿	十	十	十	味噌	十			
大根	十	十	卅		麥モヤシ	十	十	卅	十
茄子	十	十	十		豆モヤシ	十	十	卅	十
胡瓜	十	十			砂糖	一	一	一	
トマト	廿	十	卅		澱粉	一	一	一	△
ホーレンシウ	廿	十	卅	△	酵母	十	卅	一	△
キャベツ(青)	廿	十	卅	十	ジャガイモ	十	十	十	
チサ	廿	十	卅	△	サツマイモ	十	十	十	一
澤庵	十	十	一		ナツミカン	十	十	卅	
桃	十	十	卅		松茸	十	十		
バナナ	十	十	十	十	椎茸	十	十		△
苹果	十	十	十		海苔	十	卅	一	
落花生	十	十	十		ビール	十	一		
栗	十	十	十		茶(玉露)	十	十	卅	
オレンジ汁	十	十	卅	△	咖啡	十	十	十	
小豆	一	卅	十		チョコレート	△			

1983

子供の喧嘩に親が出る

進止事件

昭和八年十一月二日



1984

ちやんく (祐康生後十角)

昭和八年十二月九日



祐康は
はや立ち
そめて
この頃は
よろめき
ふから
ちやんくを
する



1985

獨逸総選挙(ナチス大勝)

昭和八年十月十三日



アルプスの北、北海の南。
峭料吹き普しナチスの風。
想ひ見る怪豪独裁の日。
血雨塵に浸すべし全歐洲。

ナチス萬歳!!!

1986

無電大祖マルコニ候来る

昭和八年十月十六日



「お伽話の
麻留見瓊さん！」



「お伽話の
チパンダの坊ちゃん！」



1987

米露握手

昭和八年十二月十七日



日本
手長猿の
米吉と露助の
赤熊めが何を
し居る



1988

有閑マダムと賭博文士

昭和八年十月十八日



吉井伯丈人

警察あんか

あんでまあいよ

久米君

も里

見君

のイク

チが無

いぬ

有閑マダム

果して勇敢

あり。

賭博文士

賭博の

覚悟ありや



1989

福建獨立す

昭和八年十二月二十一日



南京

「あの看板を卸せ、
卸さないと家を
タハキこわすぞ」

福州

「こわせるからこわして見ろ」



1990

新ラオコン

昭和八年十一月二十五日



くちの
とが
身は
くち
ふはの
いましめに
くちおしや
名も
くちはてぬ
べき





1991

農村から大都市へ
昭和八年十二月三十日



1992

下半暗き處

昭和八年十二月一日



司法官

学生

教員

公吏



1993

豫算辛ふじて纏まる 昭和八年
 十一月四日
 二十一億一千五百万円



荒木

「これで何とか
 始末がつかあいかね

大角

何十何百

高橋

後藤



1994

サベル廃止日本刀採用

昭和八年十二月六日



腰間秋水
鐵可斬



①

1995

自給自足

昭和八年十二月十三日



②



1996

醫學博士の真相

昭和八年十二月十五日



教授連

「サレく大安賣
大安賣論文
通過料が
多々千円

學位販賣所

長崎医科大学



甲

「千円は高いが
五百円で買
ひましよう」

乙
「千円は安い
一つ賣て下さい」

丙
「僕も」

丁
「僕も」

1997

米突法實施五年延期

昭和八年十二月二十二日



政府

双方

承はれ

延期じゃ

延期じゃ

米突法實施
五年延期

尺母貫

鬼に角

延期は

當然だ

キートル

怪しからん

延期とは

何だ



1998

皇太子御降誕

(明仁)

昭和八年十二月二十三日



豊あしはら

瑞穂の国を

すべらきの

日嗣のみこは

今日あれまじぬ



1999

逝ける人

自十月一日
至十二月三十一日
昭和八年十二月三十一日

沖つ海 二四

アガシ王 モハルウイン

子 牧野忠良 六七

スバルウイン 六一

江川英武 八一

境野黄洋 六三

武和三郎 六三

折原己二郎 六五

瀬川光行 七〇

赤司鷹二郎

葛谷竜岬 四八

原 六郎 九〇

韓昌 珠 七二

林曾登吉

森鳳聲

有森新吉 七四

天谷千松

オグサチンペン 八一

男 西紳六郎 七四

村山龍平 八四

新渡戸稻造 七二

藤村義朗 六四

北野元峰 九二

池口慶三 六七

子 京極高備 六一

内野辰次郎 六六

ホル・ハシルグエ 七〇

麻生太吉 七七

岸 清 一六七

山本權兵衛 八二

平福百穂 五七

矢作榮藏 六四

山崎直三 五二

西脇 晋 五二

熊谷 巖 五一

藤澤利喜太郎 七三

朝香宮妃允高親王 四三

鑄方徳藏 六九

子 上原勇作 七八

黑板傳作 五八

片山 潜 七四

2000

昭和八年畧譜

昭和八年十二月三十一日



吉凶

祐康生る

題

場刊

月

官公事項

帝室博物館工事顧問
教員檢定試験委員被免
全 被仰付

宮内省 三月
文部省 三月
" 四月
靖国神社 四月
朝鮮神宮 四月

関係工事

中村少佐記念碑
御慶場 東山社塔
靖国神社神門及燈籠
佐嘉神社燈籠
長野市明治天皇記念碑

寅内省 一月
全 二月
一高記念祭 二月
啓明会 六月
料理屋組合 七月
工部部会 九月
米沢有為会 八月
佐嘉神社 十月
朝鮮建築会 十月
東京大工組合 十月
文化学校卒業研究會 十月
早稲田高工 十一月
海峽水家庭寮 十二月

講演

日本建築の特性
日本建築の藝術的價値
一高時代の思い出
満洲の文化と建築の史的考察
建築者とメートル法
メートル法を就て
尺貫法存続
メートル法と尺貫法
佐嘉神社昇格祈愿
満洲の文化
尺貫法禁止反對
支那建築裝飾
建築之美

寅内省 一月
全 二月
一高記念祭 二月
啓明会 六月
料理屋組合 七月
工部部会 九月
米沢有為会 八月
佐嘉神社 十月
朝鮮建築会 十月
東京大工組合 十月
文化学校卒業研究會 十月
早稲田高工 十一月
海峽水家庭寮 十二月

演

尺貫法禁止反對
支那建築裝飾
建築之美

寅内省 一月
全 二月
一高記念祭 二月
啓明会 六月
料理屋組合 七月
工部部会 九月
米沢有為会 八月
佐嘉神社 十月
朝鮮建築会 十月
東京大工組合 十月
文化学校卒業研究會 十月
早稲田高工 十一月
海峽水家庭寮 十二月

尺貫法禁止反對
支那建築裝飾
建築之美

寅内省 一月
全 二月
一高記念祭 二月
啓明会 六月
料理屋組合 七月
工部部会 九月
米沢有為会 八月
佐嘉神社 十月
朝鮮建築会 十月
東京大工組合 十月
文化学校卒業研究會 十月
早稲田高工 十一月
海峽水家庭寮 十二月